

主体的で活発な音読活動を引き出す 「学習者エンゲージメント」の土台作り

大 津 敦 史*

論旨

筆者は、これまで長年に渡って、授業内での音読活動に取り組んできた。しかしながら、熱意だけはあっても、教師としての資質不足のためか、Dörnyei (2001) が指摘する、①「喚起」：学習者の興味を掻き立てたり、②「維持」：アクティブな参加状態を作ったり、③「強化」：成長実感を与えたり、することが十分できていない。そのため、これまで、どうしても学生は受動的で不活発な活動に終始してしまいがちであった。そこで、もっと主体的で活発な音読活動を引き出すには、Mercer & Dörnyei (2020、[訳] 鈴木章能、和田玲、2022) が提起する、①「学習者の促進的マインドセット」、②「教師と学習者の信頼関係 (ラポール)」、③「ポジティブな教室力学 (クラスルーム・ダイナミックス) と教室文化」の形成にもとづく「学習者エンゲージメント」の土台作りが必要になると考えた。よって、この「学習者エンゲージメント」を本研究の理論的根拠とするため、できるだけ分かり易くその内容を整理してみたい。その上で、「音読指導が学習者の英語力向上に与える効果」について理解と納得を得させ、さらには「なぜ大学で英語を学ぶのか」についての自覚を与える仕組みを考えたい。また、「ヘッドセットの装着とその効用」などについ

* 福岡大学人文学部教授

でも、これまでの経験と知見をもとに、授業内で音読活動を実施する場合の望ましい学習環境という観点から、簡単に触れてみたい。そして最後に、音読活動に絡む問題点について述べてみたい。

1. はじめに —研究の背景—

筆者は、毎年最初の授業で、まず自分の実体験を披露することを通して、音読の必要性について説明することになっている。以下が、その説明の具体的な内容である：

「私は大学3年生の時、約1年間、アメリカの大学に交換留学する機会を得ました。とある休日、親しくなったアメリカ人の友人とドライブに行き、ガス欠になりそうだったので、給油のため、近くのガソリンスタンドに寄りました。友人は、店員に向かって、「フィリィラップ・プリーズ」(実際そのように聞こえたかは定かではありませんが)、と言いました。私には、最後の「プリーズ」以外何と言ったのか、全く理解できませんでした。後になって分かったのですが、その時彼は“Fill it up, please.”(満タンにしてください)と言ったのでした。もし私がアメリカ人英語母語話者は、“Fill it up, please.”を「フィル・イット・アップ・プリーズ」ではなく、「フィリィラップ・プリーズ」と発音するのだということを身に付けていれば、彼の英語に戸惑うこともなかったでしょう。すなわち、「音読する」とは、このような音変化までも含めた自然な発音を訓練することです。しかしながら、一般の大学生のみならず、英語を専門にする大学生の中にも、高校卒業までにこのような発音訓練を経験してきた大学生は決して多くはありません。」

また、筆者は、同じく最初の授業で、「効果的な英語学習法」と題するA4用紙一枚にまとめた参考資料(資料1)を配布し、解説することになっている。

そして実際の授業では、TOEIC® Listening & Reading の Part 4 の説明文（モノローグ）問題の SCRIPT をテキストに、parallel reading、read & look up、shadowing の 3 種類の音読活動を課している。さらにチャレンジングなタスクに挑戦する余裕のある学生には、同テキストの中からキーワードを抜き出してリストにし、それを見ながら元のテキストを再生する活動を勧めている。その際、テキストと全く同じ表現ではなく、自分なりの別の表現であってもよいとしている。いわゆる retelling 活動である。

しかしながら、「論旨」中で述べたように、熱意だけはあっても、教師としての資質不足のためか、どうしても学生は受動的で不活発な活動に終始してしまいがちである。そのような時、偶然かつ幸運にも大修館書店発行の「英語教育」2022 年 11 月号において、『学習を促進する積極的関与「エンゲージメント」とは 動機づけを越えて』という第 3 特集が組まれていた。その特集に、和田玲氏による「学習者エンゲージメント（夢中）を引き出す授業の原理」と題する小論が寄稿されていた。それをじっくり読み終えた後、参考文献の中に、これまた幸運にも Mercer & Dörnyei (2020、[訳] 鈴木章能、和田玲、2022) という 1 冊を見つけ、和田氏がその訳者の一人であることを知った。そこで、早速その文献を Amazon で取り寄せ、読み始めることにした。

2. 「学習者エンゲージメント」の土台作り

Mercer & Dörnyei (2020、[訳] 鈴木章能、和田玲、2022) との幸運な出会いを通して、もっと主体的で活発な音読活動を引き出すには、同著が提起する、①「学習者の促進的マインドセット」、②「教師と学習者の信頼関係（ラポール）」、③「ポジティブな教室力学（クラスルーム・ダイナミクス）と教室文化」の形成にもとづく「学習者エンゲージメント」の土台作りが必要になると考えた。本章では、この 3 つの要因について、同著をもとにそれぞれ分かり易く整理してみたい。

2-1-0. 学習者の促進的マインドセット

学習者は、どのようなタスクであれ、自分でやり遂げられると思えなければ、積極的に取り組もう（エンゲージしよう）とはしないものである。また、学習者には「主体性」があり、教師からの教えを受動的に受け入れるだけではなく、学習を自分で計画し、タスクを遂行できると思えると、やはり同様に、積極的に取り組めるものである。このような学習者の思いを総称して「学習者の促進的マインドセット」と呼んでいる。そして、この促進的マインドセットを可能にする以下の5つの原則を提起している。

2-1-1. 原則1：有能感を高める

「ある状況下で、自分ならこのタスクをやり遂げられる」という学習者の思いを「自己効力感」と呼ぶ。この自己効力感を高めるには、「成功体験」、「フィードバックと足場かけ」、「ロールモデルと代理学習」、「感情調整」の4つの方法がある。

- 1) 成功体験：学習者にとってチャレンジングなタスクに挑戦し、全力で取り組んだ結果、成功できたという体験を積んだり、積ませたりする。
- 2) フィードバックと足場かけ：学習者の進歩を肯定的に評価（フィードバック）する。そうすることで、学習者は、目標に近づいている、タスクをやり遂げられるという実感が湧き、さらに努力する。また、「足場かけ」と呼ばれる、学習者がタスクを達成する際の教師や仲間からの手助けや支援をうまく与える。
- 3) ロールモデルと代理学習：自分と同じ立場の学習者がうまくやっているのを見たり、思い描いたりすることが、自分の励ましとなる。また、そのような学習者（ロールモデル）の体験（特に成功体験）を通して学ぶ「代理学習」と呼ばれる間接的な学びは、自分もタスクを達成できるという思いを強めてくれる。

- 4) 感情調整：タスクに取り組むことに喜びを感じ、そこから意欲が増し、楽しさを感じることで有能感や自律感が高まる。

2-1-2. 原則 2：成長マインドセットを育む

人は、生まれつき外国語（英語）を効率的に習得する学習能力を備えた人とそうでない人がいると思いきや、いわゆる「固定マインドセット」に陥るのではなく、そのような学習能力は適切な方略を用いて努力を重ねることで伸ばすことができ、誰でも自分の基本的（基礎的）な能力を向上させられるという「成長マインドセット」を学習者のみならず教師側でも育てていく必要がある。

2-1-3. 原則 3：学習者の当事者意識と自己統制感を高める

ここでいう「当事者意識」とは、例えば、英語学習を他人事ではなく、自分と直結したものと自覚することができれば、英語学習に対して強い思いを抱き、行動や反応が大きく変化することを意味している。また、自分のコントロールの下で成果を出すことが不得手な学習者つまり「自己統制感」が低い学習者は、努力などしても自分の成績は上がらないと思込み、不出来な原因を授業や教師のせいにしてしまう傾向にある。よって、「学習者エンゲージメント」を高めるには、このような「自己統制感」を同時に高める必要がある。

2-1-4. 原則 4：積極性を育てる

学習者は、積極的にタスクに取り組む「意志」と「スキル」を持つことが不可欠である。そして、この「意志」と「スキル」は、どちらも「自己調整学習」を通して伸ばすことができる。「自己調整学習」とは一般に「思考と感情と行動を自ら引き起こし、自分の目標を達成するために、それらを組織的かつ計画的に用いていく学習」と定義されている。その実現には、自分の強みと弱みの

認識、適切な目標設定、学習を方向付けるストラテジーの知識、ならびにフィードバックを繰り返してもらうことで、進歩の感覚を得ることが必要である。その意味で、この積極性は学習者の（先天的な）性格的特徴ではなく、自分が支持されているという思いや安心感が得られる学習環境から生まれて来る資質である。そのため、教師は学習者の自由な発言と行動を快く受け入れ、認めるような学習環境を与えることが必要である。

2-1-5. 原則 5：粘り強さを育てる

Mercer & Dörnyei (2020、[訳] 鈴木章能、和田玲、2022) では、この原則を Duckworth, A. (2016、[訳] 神崎朗子、2016) が導入した「グリット (GRIT)」という概念を共有しながら解説している。「グリット (GRIT)」とは、Guts (度胸)：困難なことに立ち向かう、Resilience (復元力)：失敗しても諦めずに続ける、Initiative (自発性)：自分で目標を見据える、Tenacity (執念)：最後までやり遂げる、という4要素の頭文字から命名されている。日本語で言えば、「やり抜く力」または「粘る力」のことである。英語学習のように長期にわたって努力を続ける必要がある場合には、このような資質を育てることが大切である。

2-2-0. 教師と学習者の信頼関係 (ラポール)

学習者の学びや教師の指導は、彼らが置かれた教育環境における周囲の様々な人々（教師、クラスメート、家族、他）との人間関係に大いに影響される。その中でも最も重要な関係は、教師と学習者の関係である。そして、この教師と学習者との関りを深めるため、以下の6つの原則を提起している。

2-2-1. 原則 1：近づきやすさ

教師と学習者との関係を深めるには、教師が学習者をいつでも歓迎している

近づきやすい存在でなくてはならない。「オフィスアワー」を設けている大学も多いが、デジタル・ネイティブとも呼ばれる Z 世代が相手であれば、もっと自由で形式ばらない SNS や Moodle を用いることで両者の距離を縮めることができる。また、近づきやすさを伝えるには、教師がユーモアを用いながら自分をさらけ出す「自己開示」が必要となる。ただし、職業上、ユーモアと自己開示の度合いは適切でなくてはならない。この点について、筆者は大いに反省すべきだと確信している。

2-2-2. 原則 2：共感的な態度で応じる

教師は、また、学習者の立場に立ち、学習者の視点から学習行動を見る必要がある。そのためには、分かったつもりで拙速に学習者自身やその行動を判断するのではなく、その判断をまず保留することが大切である。この「判断保留」を現象学の創始者で哲学者の Edmund Husserl は「エポケー (epoché)」と呼んでいる。教師は、まず判断を保留した上で、改めて、学習者の言語や非言語コミュニケーションをよく観察することで、学習者と共感的なコミュニケーションをすることができるようになる。

2-2-3. 原則 3：学習者の個性を尊重する

学習者の個性には、持って生まれた特質をはじめとして、その後の生い立ちや経験、能力や才能、興味やニーズなど、数え上げればきりが無い。しかも、このすべての資質を教師が理解するのは至難の業であり、正直言って不可能であろう。しかしながら、学習者一人ひとりと意思疎通を図り、信頼関係を深めるには、様々な段階があろう。その第 1 段階は学習者の名前を覚えることである。教師が自分の名前を覚えてくれていると認識するだけで、学習者はそこに帰属意識を感じるものである。生来記憶力が悪い筆者などは、この点についても反省が必要である。後は時間をかけて（とは言っても半期 14、5 回の授業内

では短過ぎるが) 一人ひとりの学習者を知り、受け入れ、能力を正しく評価する努力を続けることは大切である。

2-2-4. 原則 4：すべての学習者を信じる

2-1-2. の箇所ですべて「原則 2：成長マインドセットを育む」と関係するが、教師はすべての学習者に進歩する能力があることを信じることが重要である。そして、教師は授業内でこの「成長マインドセット」を明示的に論じるだけでなく、行動を通じてその重要性を教示していく必要がある。例えば、間違いを犯すのを恐れないように示唆するのはその一つである。また、学習者は教師が自分の学びや進歩を大切に思ってくれている、気にかけてくれていると感じることができれば、ますますタスクに積極的に取り組むようになる。

2-2-5. 原則 5：学習者の自律性を支援する

自律性の欲求は学習者が持つ基本的欲求の一つである。自立支援的な教師の多くは、自分たちはファシリテーターであると認識しており、学習のプロセスを通じて成果をあげるのは学習者自身だと考えている。したがって、学習者の好奇心や内発的動機づけを支援することはあっても、決して抑制したりはしない。そのような教師は、学習者の多様性を認め、学習者が自分の学びを自分で決められるように指導していくものだ。

2-2-6. 原則 6：教師の情熱を示す

これまでの研究から、教師と学習者の心理状態は表裏一体であることが分かっている。簡単に言えば、教師が授業に没頭し、情熱を傾けていれば、学習者もそうなる可能性が高くなる。ただ、教師も人間なので、働き過ぎたり、疲れたりすれば、指導に集中できなくなる。よって、教師も自分の幸福感 (well-being) に目を向ける必要があり、それは回復力 (resilience) と素晴らしい授

業実践のための重要な鍵なのである。

2-3-0. ポジティブな教室力学（クラスルーム・ダイナミックス）と教室文化

心理的安全性に満たされた教室文化（学習環境）を生み出すため、集団力学の原理を導入し、Mercer & Dörnyei (2020、[訳] 鈴木章能、和田玲、2022)では以下の2点に焦点を当てている：

- 1) 集団を構成するメンバー（すなわち教師および学習者同士）の関係性の質は、積極的活動意思に対してどのように作用するかという点
- 2) 教師は集団のリーダーとして集団形成にいかによりポジティブな影響を与えられるかという点

そして、これら2つの観点から、以下の5つの原則を提起している。

2-3-1. 原則1：手本を示して集団を導く

学習者の発達段階に応じて、最適なリーダーシップのスタイルは異なることがあるが、教育の世界では、通常、民主的なリーダーシップが最も効果的である。つまり、集団をリードしながらも、何かを決定する場面では権限を分かち合い、メンバーたちと合議する。そして、そのようなリーダーシップの下では、グループ内の仲が良く、何でも思ったことを言い合えるオープンなコミュニケーションの場が共有される。さらに、教師は教室内の学習者と接する時、誰一人排除しない手本を示すように心がけるだけでなく、仲間たちから排除されそうな学習者に注意を向け、彼らが輪の中に溶け込めるよう常に策を講じる必要がある。

2-3-2. 原則2：集団擬集性を高める

集団擬集性とは、集団内の親密さとメンバーが共有する「私たち」という感覚のことである。学習者が結束力の高いある集団に強い帰属意識を持てば、彼

らは教室での様々な活動に、より積極的に参加する可能性のみならず生産性も向上する。そのような環境では、連帯と調和のムードが強く感じられ、分裂したり、派閥に分かれたりすることはあまりない。

2-3-3. 原則 3：学習者間の TEA を高める

Mercer & Dörnyei (2020、[訳] 鈴木章能、和田玲、2022) は、OECD (2018) で提示された「社会情動的スキル」に関連する要素の中から、特に重要と思われるものを選び、それを TEA と呼んでいる。この TEA は、信頼 (trust)、共感 (empathy)、受容 (acceptance) の頭文字である。以下、それぞれについて、まとめてみる。

- 1) 信頼 (trust)：信頼は社会的な関係を構築するための基礎である。心理的安全性を生む最も重要な要因は、他者を頼ることができ、その反応に信頼を寄せられることにある。心配りと思いやりに満ちた教室では、教師と学習者間のみならず、学習者同士にも信頼関係が芽生える。そして、この信頼は、各個人でコントロールできるだけでなく、教師の行動によって教えられ、高められる。
- 2) 共感 (empathy)：共感の目的は、相手の考えや思いに同意することではなく、理解に努め、その理解を相手に伝えることにある。この共感教師が示すだけでなく、学習者の中に育むことができる。そして、共感なくして、ポジティブな教室力学や支え合いと優しさに溢れた関係は生まれない。
- 3) 受容 (acceptance)：受容は、違いや長所・短所に関わりなく、すべての学習者が、あるがままの自分を受け入れてもらえるインクルーシブな教室の実現を意味する。

2-3-4. 原則 4：協働と支え合いの文化を育む

エンゲージメントが活発にみられる学習環境を作るためには、学習者が学習

の過程で積極的に努力することに価値を見い出す文化を創出する必要がある。そのためには、学習者たちが互いに助け合い、規範に従わない学習者たちも受け入れていくことが大切である。その際、効果を発揮するのがピア・メンタリングである。グループワークなどをする際、あるグループの仲間がメンターとしての役割を果たし、互いに教え合い励まし合う関係を築くことである。そのようなことができるピア・メンターを育成するには、最良のメンタリング法を会得するための初期トレーニングを実施するなどして、仕組みや形式を整える必要がある。

2-3-5. 原則 5：対立は敬意をもって建設的に解決する

しつけとは、ルール違反をしたり集団の規律を破ったりした後で行われる。しつけの場面では、一貫して毅然とした態度で、秩序を乱す行動の悪影響に的を絞って、ことの重大さをきちんと説かなければならない。ただし、そのような場合でも、学習者に対する敬意を欠いてはならない。対立とは、しつけや規律の問題とは異なり、ある問題に関するメンバー間での意見の相違を指す。しかも、Dörnyei and Murphey (2023) によると、集団力学の視点から見れば、対立は必ずしも破壊的ではなく、以下の4つの点で有益なものとなる可能性がある。

- 1) 対立は学習者の関わりを深める（議論が白熱しても満足のいく解決を見れば、対立する者同士の関りは、より深いものとなる）
- 2) 対立は敵対心のはけ口になる（事態にふたをせず、膿を吐き出させる）
- 3) 対立は集団の結束を強める（集団が成熟するためには、問題の発生から解決に至るまでのいばらの道を歩ませる必要があり、集団の発達に欠かせない重要な原則の一つである）
- 4) 対立は集団の生産性を高める（批判的思考を高め、タスクごとのプロセスを改善することによって集団の生産性は向上する）

このような対立を建設的に解決するには、交渉能力が必要になる。交渉とは、対立する集団が当該の問題を念入りに調べ、それぞれの立場を明らかにして、提案や反対意見を示し合う互恵的なコミュニケーションである。大切なのは、どちらかが相手の意見に同意することではなく、お互いの考えを理解しようとする点である。

2-4. 音読活動への適用 —さらなる研究を目指して—

「学習者エンゲージメント」の土台作りに必要な3つの要因として Mercer & Dörnyei (2020、[訳] 鈴木章能、和田玲、2022) が提起する、①「学習者の促進的マインドセット」、②「教師と学習者の信頼関係 (ラポール)」、③「ポジティブな教室力学 (クラスルーム・ダイナミックス) と教室文化」とそれらを促進する各原則について、分かり易くまとめてみた。これらの各原則をいかに音読活動に適用することができるのか、同著が提案する各原則を具現化するのに有効な「教師の行動」を参考に、さらに研究を深めたい。

3. 音読指導が学習者の英語力向上に与える効果について

音読指導の際、どうして音読訓練が学習者の英語力向上に効果があるのかを分かり易く説明し、理解と納得を得た上で始めることが肝要である。

門田 (2007)、清水 (2009)、雪丸 (2011) などの先行研究では、音読訓練が音読能力それ自体以外に、リーディング能力、リスニング能力、それにスピーキング能力向上に与える効果に関する理論的根拠を以下の2点にまとめている。

- 1) ディコーディング過程を高速で行うことによる読みのボトムアップ処理の自動化
- 2) ワーキングメモリーの一部である音韻ループ内の内語反復過程を効率的かつ顕在的に行うことによる新規学習項目の内在化

しかしながら、このままでは大学生といえども普通の英語学習者には何のことも理解不能であろう。そのため、私は、「音読訓練を重ねれば、文字を見て、自分の脳から音と意味を引っ張ってくる時間を限りなくゼロ秒にすることができるようになります」と平たく説明をすることになっている。

さらに音読指導では、音読する際に注意すべき点をあらかじめ具体的かつ簡潔に示した後、トレーニングを始めた方がよい。その内容としては、ストレス、リズム、イントネーションに加えて、連結、同化、脱落、弱形、それにアメリカ英語であれば/t/や/d/のフラッピング（ら行化）などに関する説明とトレーニングである。近年、ネット上には、英語の音声変化について、音源とイラスト付で簡潔に解説しているサイトがあるので、それを活用するのも効果的である。以下はその例である：

<https://english-listening-center.com/blog/phonetic-change/>

4. なぜ大学で英語を学ぶのか

音読活動が英語能力向上に与える効果とその理由を認識する前に、学習者はそもそもなぜ大学で英語を学ぶのかという問いに対する自分なりの答えを自覚しておくべきだと思う。しかしながら、その答えが個々人によって異なるのは明白である。

2023年3月に「一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 (IIBC)」から発行された *IIBC NEWSLETTER Vol. 148* を参照すると、「英語学習者にアンケートを実施！ なぜ英語を学ぶのか」という特集が組んである。アンケートは、現在英語を学習している、または今後英語を学習しようと考えている一般人を対象に、2022年11月17日～11月22日の期間、オンラインで実施され、496人から回答を得ている。

本アンケートでは、まず英語学習の理由を尋ねていて、「かなえたい夢や目標があるため」が57.5%と最も多く、次いで「学校や会社で必要だから」が

39.1%、「英語が好きだから」が31.7%、その他が3.6%であった。すべてを足した数値が100%を超えるのは、複数回答を可としているためだと推測される。次に、どのような夢や目標を持っているのかを聞くと、仕事に関することでは、「海外とやり取りする仕事に就きたい」が35.3%と最も多く、次いで「英語圏に海外駐在したい」が26.2%、「非英語圏に海外駐在したい」が22.0%、「外資系の企業で働きたい」が21.2%、学校などに関することでは、「英語圏に海外留学したい」が17.7%、「英語圏でインターンシップやワーキングホリデーをしたい」が16.7%だった。仕事や学校に関すること以外の夢や目標においては、「海外旅行に行きたい」がトップで、「映画を字幕なしで見たい」、「外国人の友達を作りたい」と続いているようである。

5. 音読活動時におけるヘッドセットの装着とその効用について

最近、大学での外国語学習環境に変化が生じている。ひと昔前であれば、個々の学習者にヘッドセットを完備したCALL教室やPC教室があったが、年々その数は減少している。そうなりつつある大きな理由は、BYODの導入が大学でも進んでいるからであろう。また、その背景には、スマートフォンやタブレットの基本スペックが向上したことやデバイスに依存しないクラウド型あるいはWebベースのアプリケーションを使用する頻度が増えたことなどがあげられるし、何と言っても大幅な経費削減につながる。

そのような教育環境の変化の中で、大きな声を出さずとも音読効果が上がる方法として、ヘッドセットで耳をふさぎ、ささやき声で音読する方法もある。医学博士で受験アドバイザーの福井一成氏によると、ヘッドセットを装着した状態で音読すると、ささやき声でも骨伝導で声が頭の中で大きく響くため、集中力がアップするそうだ。ささやき声ならば、音読による喉の疲れを軽減できるし、周りの学習者を気遣う必要もない。理由は様々であろうが、この「周りの学習者への気遣い」は、ヘッドセットが無い場合、日本人学習者にとって、

音読活動の大きな障壁となると感じている。

また、ヘッドセットのマイクは、周りのノイズを拾いにくい単一指向性マイクを使用し、自分の息によるノイズを軽減するウインドスクリーン付きだとさらに最適である。

6. 音読活動に絡む問題点

6-1. 音読活動における「コーラスリーディング」の不要性について

菅正隆（2023）に、以下のような指摘がある。まったく同感なので、参考にした。

教科書本文の音読の際、慣例となっている「コーラスリーディング」という言葉を今でもよく目にする。生徒の多くは、音の特徴や英文内容を意識せず、ただ機械的に口を開いているだけである。効率や効果の点から考えれば、この活動はもうなくしてもよいのではないだろうか。時は ICT の時代である。教科書掲載の 2 次元コード（QR コード）やデジタル教科書から、モデルとなる音声データを聞くことは容易である。そこで、代替策として次のことが考えられる。

- ① ICT 機器を利用して、クラス全体での音読練習から個人の音読練習へと変更する。
- ② 小学校を含め、2 次元コードを利用して、自宅での音読練習を家庭での宿題とする。

まさに参考にした提案である。

6-2. 「音読そのものはアウトプットにはならない」という指摘

酒井（2023）は、Levelt, W. J. M. (1989) の言語産出モデルによれば、人はメッセージを生成する「概念化装置」（conceptualizer）、文法符号化（grammatical

encoding) と音声符号化 (phonological encoding) によってメッセージを言語化する「形式化装置」(formulator)、言語化された情報を発話する「調音化装置」(articulator) を経て発話されると説明している。そして、音読の場合、書かれている英語を音声化するプロセスではあるが、その際、調音化装置しか働かず、概念化装置や形式化装置は機能していないため、音読は話すことであるとは見なせないと述べている。

そして酒井 (2023) は、M. Swain のアウトプット仮説 (Output Hypothesis) においても、自分が伝えたい内容を考え、自分の力で英語で表現し、そして発話するというプロセスが重要で、音読においては、アウトプット仮説が提唱している第二言語習得の効果は得られないと結論づけている。その一方で、音読には書かれた英語の意味を深く理解することを促進したり、書かれた文字情報を見て音声化する処理の効率化を図ったりするといった意義があると提唱している。そして、最後に、授業 (英語学習) には、音読活動だけでなく、自分の伝えたい内容を自分の力で表現するアウトプット活動を取り入れる必要性を訴えている。

確かに、音読それ自体は、自分の伝えたい内容を自分の力で表現するアウトプット活動とは言えない。しかしながら、自分の伝えたい内容を自分の力で表現するアウトプット活動は、学習者、特に初級レベルの学習者には、かなりの負担を与えるため、何らかの「足場かけ (scaffolding)」が必要になる。そこで、筆者が「1. はじめに —研究の背景—」で紹介した、以下の retelling 活動は、音読活動の仕上げとして、アウトプット活動につながるタスクだと思われる。

「さらにチャレンジングなタスクに挑戦する余裕のある学生には、同テキストの中からキーワードを抜き出してリストにし、それを見ながら元のテキストを再生する活動を勧めている。その際、テキストと全く同じ表現ではなく、自分なりの別の表現であってもよいとしている。」

具体的な題材としては資料2を参照願いたい。これは、鳥飼玖美子（2003）からの援用で、昔、音読活動を授業に取り入れた頃に頻繁に活用した題材である。

7. 結びに変えて

主体的で活発な音読活動を引き出すため、Mercer & Dörnyei（2020、[訳]鈴木章能、和田玲、2022）が提起する、①「学習者の促進的マインドセット」、②「教師と学習者の信頼関係（ラポール）」、③「ポジティブな教室力学（クラスルーム・ダイナミックス）と教室文化」の形成にもとづく「学習者エンゲージメント」を本研究の理論的根拠として、若干加筆しながら、できるだけ分かり易くその内容を整理した。その上で、学習者に「実際問題として、音読活動は英語力向上に資するのか」、「そもそもなぜ大学で英語を学ぶ必要があるのか」といった疑問に答え、最後に音読活動に絡む諸々の問題点や課題について述べた。願わくは、と言っても、あと数年で退職を迎える筆者には難しいかもしれないが、真に主体的で活発な音読活動を実現できる日が来ることを祈るばかりである。

資料1

効果的な英語学習法

英語力を伸ばすには、質と量の双方が必要です。ただ、長時間学習すれば英語力が身に付くというわけでもありません。やはり科学的にその有効性が証明されている方法に従って、効率よく学習するのが最も効果的だと言えるでしょう。

以下、現在私が最も効果が上がると保証できる学習法を紹介します：

1. 概要を聴き取ることを目標にテキストを見ずに一度通して聴く、その際、聴きながら頭の中にその光景やイメージを描きながら聴くと効果的（右脳の活用）。
2. パラレルリーディング（黙読1～2回）：テキストを見ながらモデルが発音している箇所を目で追って行く、それと同時に、脳に入ってくる順に前から前から意味処理をする。
これを「順送り理解」と呼び、英語力の根幹となる能力すなわち「英語脳」を育成してくれる。
3. 内容（語句や文全体の意味）の確認：辞書を活用してもよい。
4. パラレルリーディング（音読5回）：モデル音に遅れずにかぶせて（ほぼ同時に）発音する。
5. Read & Look-up（3回）：チャンク（意味のかたまり）やフレーズ（節）やセンテンス（文）毎に、さっと一度黙読し、テキストから目をあげ、黙読した箇所を発音する。
6. Shadowing（多ければ多いほど効果的：最低10回～15回）：以下を参照。
7. Keyword Recitation（1回）：テキストの中からキーワードと思われるものだけを抜き出してリストを作成し、そのリストを見ながら、もとのテキストを再生する。その際、テキストとまったく同じ表現ではなく、別の表現であってもよしとする。

【英語シャドーイングのすすめ】

英語のshadow から来ていて、「影のように後に付いて行く」という意味です。つまり、モデルの音声を聞きながら、テキストを見ずに、ほぼ同時にあるいは1、2語遅れて付いて発音して行きます。

これは、単に正確に英語の音を聞き取るだけではなく、正しく発音する習慣も同時に訓練しますので、一石二鳥の効果が期待できます。また、同じ英文を何度かシャドーイングすることで、その英文を構成するチャンク（chunk）＝意味のかたまり（単語ではなく、よく使用される決まり文句）を記憶に定着させることもできます。そうなれば、実際に自分が英語を話したり、書いたりする際の表現のレパートリーとして利用可能です。

問題は、どのような教材を選ぶかですが、これはやっぱり自分の興味にあったおもしろいと感じる内容のものがいいでしょう。また、対話よりは論理的な展開も学習できるエッセイ風のモノローグがいいと思います。最初は、あまりスピード（発話速度）が速くなくかつ語彙も95%以上既習の語彙を含むものから始めて、段々スピードを上げていくといいでしょう。しかし、難しい語彙が頻繁に登場する英文は避けた方が賢明です。

この訓練では特に左脳を酷使しますので、訓練時間は毎日20分程度でもいいと思います。その後、気楽に英語をつけっぱなしにしてBGM代わりに聞き流すのもいいかもしれません。もちろん「気分を英語漬け」にするだけです。... よって、かつてTVのCMに登場したSpeed Learningのような教材にどれほどの効果が期待できるのか首をかしげたくになります。

資料2

Parallel Reading 用の原文

Thanksgiving

Thanksgiving is celebrated every year on the fourth Thursday of November. Autumn is the season when crops are gathered. When the first European

settlers in America gathered their crops, they celebrated. They thanked their God for the success of the harvest. Tradition says the first Thanksgiving was celebrated in 1621 by Pilgrim settlers from England. There is evidence that settlers in other parts of America held earlier Thanksgiving celebrations. But the Pilgrims' Thanksgiving story is the most popular.

Read & Look-Up 用のチャンク

Thanksgiving is celebrated
every year
on the fourth Thursday of November.
Autumn is the season
when crops are gathered.
When the first European settlers in America gathered their crops,
they celebrated.
They thanked their God
for the success of the harvest.
Tradition says
the first Thanksgiving was celebrated
in 1621
by Pilgrim settlers
from England.
There is evidence
that settlers in other parts of America held earlier Thanksgiving
celebrations.

But the Pilgrims' Thanksgiving story is the most popular.

Retelling 用のキーワード

Thanksgiving

every year

the fourth Thursday.

Autumn

crops.

the first settlers their crops,

celebrated.

thanked

the success.

Tradition

the first Thanksgiving

1621

Pilgrim

England.

evidence

other parts

earlier celebrations.

the Pilgrims' story

popular.

参考文献

- 一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 (IIBC) 編著 (2023), *IIBC NEWSLETTER Vol. 148*.
- 門田修平 (2007), 『シャドーイングと音読の科学』, コスモピア.
- 経済協力開発機構 (OECD) 編著 (2018), 『社会情動的スキル—学びに向かう力』, 明石書店.
- 酒井英樹 「インプット—インタラクション—アウトプットの疑問に答える— i+1, 中間指導、音読について」『英語教育』2023年5月号, 大修館書店, pp20-21.
- 清水寛之 (2009), 『メタ記憶: 記憶のモニタリングとコントロール』, 北大路書房.
- 菅 正隆 「授業のコベルニクスの大転回 —まずは、やってみなはれ!—」『英語教育』2023年4月号, 大修館書店, pp. 36-37.
- 経済協力開発機構 (OECD) 編著 (2018), 『社会情動的スキル—学びに向かう力』, 明石書店.
- 鳥飼玖美子 [監修] (2003), 『はじめてのシャドーイング』, 学研.
- 雪丸尚美 「日本人大学生に対する音読指導が英語読解能力向上に与える効果」, 『西南学院大学言語教育センター紀要』1巻 (2011), pp. 44-55.
- Dörnyei, Z. (2001), *Motivational Strategies in the Language Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press. [訳] 米山朝二, 関昭典訳 (2005), 『動機づけを高める英語指導ストラテジー 35』, 大修館書店.
- Dörnyei, Z and Murphey, T. (2023), *Group Dynamics in the Language Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Duckworth, A. (2016), *Grit: The Power of Passion and Perseverance*. NY: Scribner. [訳] 神崎朗子 (2016), 『やり抜く力 GRIT—人生のあらゆる成功を決める「究極の能力」を身につける』, ダイヤモンド社.
- Mercer, S & Dörnyei, Z. (2020), *Engaging Language Learners in Contemporary Classrooms*. Cambridge: Cambridge University Press. [訳] 鈴木章能, 和田玲 (2022), 『外国語学習者エンゲージメント』, アルク出版編集部.